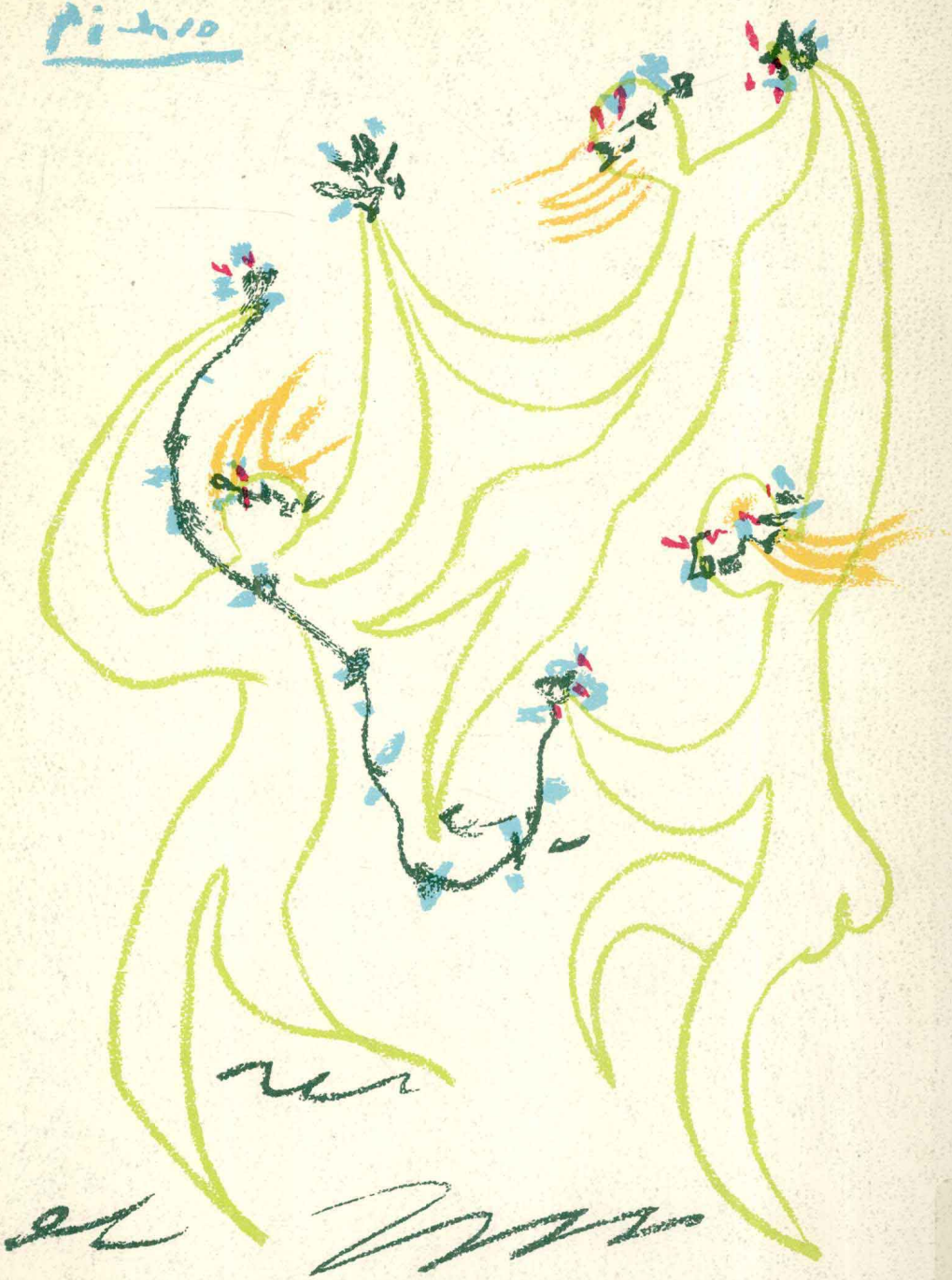
Picasso

ノーベル賞文学全集

NOBEL PRIZED LITERATURE

後援

スウェーデン・アカデミー

ノーベル財団

This collection of
the Nobel Prizes in Literature
is edited under
the patronage of
the Swedish Academy and
the Nobel Foundation.

主婦の友社

ノーベル賞文学全集　21

モムゼン
オイケン
ベルグソン

訳者　長谷川博隆
氷上英廣
松浪信三郎
高橋允昭
水島裕雅
秋山英夫

授与演説および受賞演説の収録に際しては、集英社のご厚意を得ました。

昭和47年7月5日　発　行
発行者／石川数雄
発行所／株式会社主婦の友社
東京都千代田区神田駿河台 1-6
郵便番号 101
振替 東京 180 番
電話 東京(03)294-1111(大代表)
印刷所／凸版印刷株式会社
製本所／寿製本株式会社
大口製本印刷株式会社
本文用紙／本州製紙株式会社
表紙／日本クロス工業株式会社
クロス
製函／凸版印刷株式会社

© 主婦の友社 1972 Printed in Japan
0397-522216-3062

編集顧問

川端康成

芹沢光治良

編集委員

高橋健二

佐藤亮一

白井浩司

山室　静

表紙装画

パブロ・ピカソ

装丁

原　弘

第6回日本翻訳出版文化賞受賞

ノーベル賞文学全集　全24巻　別巻1

● シェンキェーヴィチ　キプリング　(訳)木村彰一　飯島淳秀
● ロマン・ロラン　イェンセン　(訳)宇佐見英治　山口三夫　河盛好蔵　竹内孝次
3　ボントピダン　ギェレルプ　シュピッテラー　(訳)竹内孝次　林髞二　高橋健二　㉔(72.9)
● ハムスン　アナトール・フランス　レイモント　(訳)山室静　伊吹武彦　鈴木力衛　米川和夫他
● デレッダ　ウンセット　シンクレア・ルイス　(訳)大久保昭男　稲富正彦　刈田元司
● トーマス・マン　ゴールズワージ　(訳)浅井真男　佐藤晃一　渥美昭夫
● ブーニン　パール・バック　シランペー　(訳)原卓也　村岡花子　佐藤亮一　桑木務
● マルタン・デュ・ガール　ピランデッロ　(訳)青柳瑞穂　米川良夫
● ヘルマン・ヘッセ　パウル・ハイゼ　(訳)高橋健二　小塩節
● アンドレ・ジッド　モーリヤック　(訳)若林真　片岡美智　堀口大学　白井浩司　井上究一郎
● フォークナー　ラーゲルクヴィスト　(訳)速川浩　山口琢磨
● ヘミングウェイ　(訳)石一郎　高村勝治
● ラックスネス　カミュ　アンドリッチ　(訳)山室静　渡辺守章　鬼頭哲人　栗原成郎
● パステルナーク　ショーロホフ　アストゥリアス　(訳)工藤幸雄　工藤精一郎　鼓直他
● スタインベック　アグノン　(訳)大橋吉之輔　村岡崇光他
● 川端康成
● ベケット　ソルジェニーツィン　(訳)安堂信也　高橋康也　江川卓　水野忠夫
● ラーゲルレーヴ　メーテルリンク　ヒメネス　(訳)香川鉄蔵　川口篤　長南実
● ビョルンソン　エチェガライ　ハウプトマン　ペナベンテ　(訳)毛利三弥　荒井正道　秋山英夫他
● イェイツ　ショー　オニール　(訳)高松雄一　出淵博　尾島庄太郎　福田恆存　倉橋健　菅泰男
● モムゼン　オイケン　ベルグソン　(訳)長谷川博隆　氷上英広　松浪信三郎
● ラッセル　チャーチル　(訳)大竹勝　佐藤亮一
● シュリィ・プリュドム　F・ミストラル　カルドゥッチ　タゴール　ヘイデンスタム　カールフェルト　(訳)川崎竹一　杉富士雄　河島英昭　福田陸太郎　田中三千夫他
24　G・ミストラル　T・S・エリオット　クヮジーモド　サン＝ジョン・ペルス　セフェリス　ネリー・ザックス　(訳)荒井正道　福田恆存　河島英昭　多田智満子　秋山健　生野幸吉　㉓(72.8)
別巻　ノーベル賞物語　㉔(72.9)

(注)…数字は巻数(白抜きは既刊)、○印の数字は予定刊行順序、(　)内は刊行年月。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

モムゼン

選考経過…グンナー・アールストレーム……長谷川博隆訳…6
授与演説…C・D・アヴ・ヴィルセン……長谷川博隆訳…10
ローマ史（抄）……長谷川博隆訳…15
人と作品……長谷川博隆…127
著作目録……長谷川博隆編…430

オイケン

選考経過…グンナー・アールストレーム……水島裕雅訳…144
授与演説…ハラルド・イェルネ……秋山英夫訳…148
受賞記念講演
自然主義か理想主義か…ルードルフ・オイケン……秋山英夫訳…153
人生の意義と価値（抄）……氷上英廣訳…163

人と作品……氷上英廣……203
著作目録……水島裕雅編……434

ベルグソン

選考経過…シェル・ストレムベリイ……松浪信三郎訳……212
授与演説…ベール・ハルストレーム……松浪信三郎訳……215
受賞演説……松浪信三郎訳……218

創造的進化

……松浪信三郎
高橋允昭訳……221
人と作品…ジャン・ギトン……松浪信三郎訳……422
著作目録……松浪信三郎編……437

肖像画／ミッシェル・コーヴェ……4、142、210
カラーさしえ／アルベール・デカリス（モムゼンの作品）
……48～49、64～65、96～97、120～121
フランツ・ボアントー（オイケンの作品）
……184～185
イシス・キシュカ（ベルグソンの作品）
……264～265、280～281、336～337

テオドール・モムゼン

一九〇二年受賞（八十五歳）

（ドイツ　一八一七～一九〇三）

ローマ史（抄）

Theodor Mommsen

モムゼン

選考経過

授与演説

テオドール・モムゼンに対する ノーベル文学賞授与の選考経過

スウェーデン海外文化振興協会
グンナー・アールストレーム

ノーベル賞委員会の仕事は、一九〇一年にはじまったのであるが、それは、委員会にとっても暗中模索の時代であった。人の目にもつかない小国のアカデミーが、シュリィ・プリュドムに、世界的な規模でなされる賞を授与したのである。それは、すばらしい歓迎を受けた。フランスの名声、いやパリのアカデミーの名声は、この時代の大衆に対して、受賞者の権威の不十分さ、および聴衆の数のすくなさを補うものがあった。実は、この決定が、『ルーゴン＝マカール』の作者[1]のみならず、『復活』および『われらなにをなすべきか』でもって世界の良心を揺り動かした使徒的人物[2]をも断乎として無視した決定であると、公式には記録されているのである。

このトルストイの除かれたことに対する公的な抗議に対して、スウェーデン・アカデミーの常任理事は次のように返答した。規約に照らしてみて推薦の権利をもついかなる個人、あるいはまたいかなる組織からも推されていなかったため、この優れた候補者は、討論の対象にならかったのである、と。つまり全世界のだれ一人として、アカデミーにトルストイの名前を提示しなかったわけなのである。

以上は、不十分なる弁明であったかもしれないが、しかし絶対に非難には値しまい。でも、その直接の結果として、トルストイの讃美者が、〝このような遁辞の空しさ〟を明らかにしようとして筆をとるということが起こったのである。作家の抗議をスウェーデンにおいて鼓吹した人物は、ストックホルム大学の文学の教授の資格でもって、はなはだ熱心に動議を出してきた。それは、芸術なるもののあらゆる規準に照らして、『復活』を例として行なわれたのであった。

同じような意図をもった書簡が、フランスのリシュタンベルジェル[3]（ソルボンヌの人）から、そしてコレジュ・ド・フランスの教授のミシェル・ブレアール[4]から送られてきた。この書類には、リュドウィク・アレヴィー[5]の大事な推薦状がそえられてあった。アレヴィーは、アンリ・メイヤック[6]と共同で、青年時代にオッフェンバック[7]の軽喜歌劇の陽気な筋書を書いた人物であり、その後ずっと、各種の文学活動をつづけてきて、騒々しいパリ文壇において、年取ってからは〝芝居の有能なる父親役〟のようになっていたのである。一八八四年には、アカデミー・フランセーズの会員に選ばれ、ヤシュヤーナ・ポリアーナの人（トルストイ）のために、推薦の権利を行使したのである。実は、ノーベル賞の場合、対照が行なわれるのであるが、『ラ・ベル・ヘレーネ』は『アンナ・カレニナ』を縮めたものであるし、『フル・フルー』と『アベ・コンスタンタン』はネフィリュード公爵と『暗闇の力』に敬意を表している。

ところで、トルストイの立候補は、全く異論のないやり方でもって行なわれたのである。このことは、実はゆるがせにはできなかった。アカデミーは立場を決めなければならなかったのである。伝統によれば、常任理事の役割は、決定を下すための、正当なる根拠をみつけるということにあったのである。たといそれが人受けの悪いものであろうとも。常任理事・アヴ・ヴィルセン博士は、自分に関係のあるこの仕事を〝熱情をもって〟果たした。すばらしい才能を駆使して、主観的には容れられないことを客観的な理性に適合させる、そういう仕事に熟達した人物であったといえる。『戦争と平和』の作者はたしかにすばらしい作家である。しかし残念なことに、道徳の領域では、そのふるまいは議論の余地もあるかのようにみえるし、その及ぶところでないのに、またディレッタントであるにもかかわらず、勝手に聖書の批判を行なっている。そこで、もしノーベル賞がただその文学的な功績によって決定されるのであったならば、この賞が信条としている理想主義は、彼の革命的な主義・主張を受けいれねばならなくなるであろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

実は、ここにはまた、二重の危険性が生ずることになるのである。たしかにこれは、あの卓越した遺言者ノーベルの考えではなかった。こういった点から、トルストイ自身の生き方が、侮蔑の念で賞を拒否する、ということになったわけなのである。このようにして、彼の欲しない賞金を受けさせるべき理由はないということになったのである。

そこで、トルストイは選考の外におかれたのである。しかしほかに候補者がいなかったわけではない。偉大な人物、あるいはそれには少少劣るがやはり優れた人と。とくにこの後者には、たまたま名の出るような人たちが、色々あったようである。つまり、ノーベル財団の新しさのために、そしてまた賞の性格についての誤解のために、様々な方面からの奔走の対象になったのである。こういった運動者の間では、抒情詩、宗教的な注解、社会改革の領域に属する、すこぶる才能ある人たち、だが全く忘れ去られた人たちの、つまらない理論が横行していたのである。しかし、それは、正しく浄書された記録という形で、このような忘却、脱落を、公平に弁明することにはなった。

トルストイは、失格者のサロンの中の立派な一員である。エミール・ゾラも、心酔者ベルテローにより「その人道主義的な小説のために」あらためて推薦されたのである。ガストン・パリスとフレデリック・ミストラルも、ジョージ・メレディス[8]やウィリアム・バトラー・イェイツ、ジョズエ・カルドゥッチ、アントニオ・フォガツアロ[9]、ゲルハルト・ハウプトマン、ヘンリク・シェンキェーヴィチ、ヨアンニ・アホ[10]といった良き仲介者を得た。もっともここにでてくる名前の多くは、つづく何年かの間にとりあげられてゆくことになるのである。ノーベルの金は、かなり長い期間に、彼らの間のなん人かの人たちの手におちてゆくのであった。

実は、ノーベル賞をシュリィ・プリュドムに授与することは、アカデミー・フランセーズの推薦・奔走で取り決められたのであった。そこで、全ヨーロッパで次のように思われたのであった。まとめてなされた推薦が、最大のチャンスを与えたのである、と。ところで、一九〇二年には、アカデミーが、その最終決定をしなければならないというこのやり方に従って、決定は、推薦された名前のなかからなされたのである。有力者の署名を備えて、請願の形でなされた立候補は、最初の模索の時代においては欠けていた保証の裏づけとなっていたのである。また次のようにも考えられたのである。つまり、賞は、時代の気まぐれ、あるいは偶然の才人の作に譲歩して与えられるものではない、こういった確信があったわけなのである。

イギリスがノーベル賞の歴史に登場したのは、以上のようなタイプの集約的な見地に立ってのことである。ロンドンの「作家協会」のなかに特別の委員会が組織され、イギリスの候補者に関して、作家協会員の意見を探ったのである。そしてこの委員会は、公式の推薦文を起草するという目的のため、会員に名前のリストを送付したのであった。すべてが良くでき、うまく、立派に構成されていた。

一月のある日、スウェーデン・アカデミーは、イギリス作家協会のスポークスマンたるエイブベリ卿[11]の信書を受けとった。協会では、ノーベル賞がM・ハーバード・スペンサー[12]に授与されるよう大多数の人が主張している、というふうに読みとることができた。この候補者に

1 エミール・ゾラ(一八四〇〜一九〇二)。フランスの自然主義を代表する作家。膨大な『ルーゴン＝マカール』は二十の小説グループで社会史の傑作。「ナナ」「居酒屋」はそのなかの一つ。
2 トルストイ(一八二八〜一九一〇)をさす。
3 フランスのドイツ学者(一八六四〜一九四一)。
4 フランスの言語学者(一八三二〜一九一五)。
5 フランスの作家(一八三四〜一九〇八)。メイヤックと合作でオッフェンバックの陽気な軽喜歌劇の台本を提供した。
6 フランスの劇作家(一八三一〜九七)。
7 フランス(ドイツ生まれ)の軽喜歌劇作曲家(一八一九〜八〇)。コメディ＝フランセーズの楽長を経て、小劇場をたてて、自作を上演した。代表作『ホフマン物語』。
8 イギリスの詩人、小説家(一八二八〜一九〇九)。
9 イタリアの作家(一八四二〜一九一一)。国民的小説をものし、倫理的、宗教的主題を取り扱う。
10 フィンランドの小説家(一八六一〜一九二一)。抒情的作家。フィン語(スオミ語)文学の大成者。
11 イギリスの銀行家で著述家(一八三四〜一九一三)。名著『先史時代』の著者。
12 イギリスの哲学者(一八二〇〜一九〇三)。ダーヴィンの進化論の立場にたって、自然、社会、歴史などすべての現象を体系的に統一した。認識の相対性を主張し、また不可知者を設定している。主著『社会学原理』『総合哲学大系』。

票をいれたものの中に――四十八人を下らなかったが――当代の文学者の大多数がはいっていたわけである。トーマス・ハーディ、J・M・バリ、オースティン・ドブソンが、リーダー・ハガード、アーサー・コナン・ドイル、アーサー・ビネロのような大衆作家に支持されて、先頭に立っていた。文献学あるいは文学史の点でも、同じように、エドモント・ゴッス、フレデリック・ボアス、ウォルター・スキート、エドワード・ダウデンが代表者になっていた。これらはすべて、その働きの点からして疑いをいれる余地のない重要なる推薦であった。

エイブベリ卿は、スウェーデン・アカデミーの理事会がスペンサーを知らないはずはない、と推測しておられたようである。「彼の作品は、貴方および貴協会の他のメンバーの方にも知られているにちがいありません」と。もちろん、アヴ・ヴィルセン博士は、スペンサーを知りすぎるほど知っていた。この立候補は、ストックホルムの保守党員の団体により、大満足の歓声でもって迎えいれられた。しかし、この名は、常にスカンジナヴィアの地への戦争の叫び声をつくりあげており、アカデミーの管轄・権能に関して争っていた青年にとって、確実なる手段を形成していたのである。そういったわけで、次のような結論が下された。『社会学原理』という大著によってそびえ立つ才能は、言葉の普通の意味で、適切なる文学的能力を証明するものではない、と。言葉は気取っていて、用意周到、しかし決して輝かしいものがあるとはいえなかった。

ところで、スウェーデン・アカデミーとしては、数日後に立派な二者択一の件がドイツから起こされ、もっとも受けいれられるものとしてあらわれたので、そのとき、このむつかしい選定を行なうことになったのである。実は、ベルリンのプロイセン科学アカデミー、つまりフリードリヒ二世とライプニッツの創設したプロイセン・アカデミーは、その主著『ローマ史』で燦と輝く、有名な歴史家テオドール・モムゼンを推したことを、記録によって知らせてきたのである。ここでは、決して力強い請願がなされているわけではなかった。サインをした人の数は十八人に限られていた。しかし十八人の勇者だったのである。慎しみ深いが凛として、人数のことを参酌するのを特別にさしひかえたということ、しかしその代わりに、どういう名前を選んだか、その選択には全く満足しているということ、そういった点を指摘していた。彼ら教授たちは、シュプレー河畔の古い都(ベルリン)における大ヒューマニストたちの時代を代表する人たちであり、もうそれで十分だったのである。すなわち、アドルフ・フォン・ハルナックのような博学の神学者、グスタフ・フォン・シュモラーのような歴史家、ウィルヘルム・ディルタイのような哲学者、エリッヒ・シュミットのような文学史家、あるいはヘルマン・ディールスやウルリヒ・フォン・ウィラモヴィッツ・メーレンドルフのような古典学者なのである。この最後の人物、ウィラモヴィッツ・メーレンドルフが、自分の本当の舅を推しているという事実は、決してその価値を減ずるものではなかった。

規約によれば、アカデミーは、そもそものはじめから文学の概念を拡大できる力をもっていたのである。つまり純粋な詩以外の人文的な創作をもこれにいれるという具合に。ところで、モムゼンの大作は、最高級の芸術上の偉業と同じものを含んでいた限りにおいて、右のような考えにぴったり適合していたのである。作者は、この著作のなかで、スタイルのすばらしさ、ドラマチックなポートレートの技量とか、あるいは事件についてのドラマチックな感覚――もっとも、これらはローマ人の歴史の最後のところでモムゼンのみせている慎しみ深い指摘を、自ら完全に否定してしまう類いのものであるが――を示している。『ローマ史』のなかで、たしかにわれわれは次のような表現に出くわすのである。

「歴史叙述とは、個々の魅力的な細部、情趣の叙述、特徴ある顔を示すことではない。アルミニウス[2]のおもてを創作することは、歴史叙述家の仕事ではなく芸術家の仕事である。私はこの本を諦念の気持ちで書いた。したがって、読者も諦念をもって読んでもらいたいのである」

でも、この本を読むことはちっとも止まなかった。――このことは、数多くの版を重ね翻訳が行なわれることによって、長年にわたって確証されてきたのであるが。あらゆる文明国において、歴史文学の領域での世紀の大作品の前に自分は立っているのだ、と人が感じるというのも、納得できよう。したがって十一月十三日のスウェーデン・アカデミーの選定は、決して困難なことではなかった。一九〇二年の賞

は、とりわけその記念碑的な作品『ローマ史』のため、歴史叙述の見事な腕を示しつつ現在活躍中のもっとも偉大な巨匠であるテオドール・モムゼンのものになったのである。

前の年は、過ぎ去りしときのものといえる詩作品に賞が与えられた。ところで今回のモムゼンの場合も、またもや現実にかかわりのあることの方を悪くとった上での結果であるかのようにみえたことであろう。

なるほどモムゼンの生を享[3]けたのは、一八一七年のことであり、『ローマ史』のもっとも重要な部分、つまり第三巻は、すでに五〇年代に発行されている。実はモムゼンは、高齢のため、受賞の日にストックホルムで月桂冠を受けることができなかった。しかし、アカデミーは批判を受ける用意があったのである。つまり、生涯かけた作品にしか賞を与えないとか、あるいは消え去った影みたいなものしか想い出させてくれないという批判に十分応えられるつもりだったのである。

以下の見事な演説の数行は、常任理事会がなぜ十二月十日、ドイツ大使・ライデン伯に賞を手渡したかということについての理由といえよう。

「芸術と学問とは、多くの場合、それにたずさわる人つまり芸術家と学者を精神の点で若々しく保つ力があるといえます。モムゼンは学者であるとともに芸術家であります。そこで、八十五歳でも、仕事においては若々しいのであります。……ノーベル文学賞のメダルは、ミューズの女神[3]の妙なる調べを聴いている若者を描いております。なるほどモムゼンは年をとっているかもしれません。しかし彼は青年の炎をもっているといってよいでしょう。モムゼンの『ローマ史』をひもといてまいりますと、ひとは、奇しくも、クリオもミューズの女神の一人であったことをはっきりと知ることでありましょう」

アヴ・ヴィルセン博士は実はこのように言っているのである。

この表彰の文章はすぐにドイツの新聞に転載され、二日後に、モムゼンが、この美しい言葉に対して、比類ないスタイルの文章でもって、次のような感謝の意を表明した。

「これは、私を、あたかも生涯のはじめの地点に立っていたときのような気にさせました。私の一生を、鋭くかつ好意あふれるご批判によりまして、色々なそして実のところ奇妙に調和のとれていない形とはいえ、ともかく構成し直すことができました。本当にこのようなご事情でございましたら、私にとってこれ以上に優れた記念の講演を望むことなどできなかったでしょう。しかし、私たちは実は、今もって全くそのようなところに留まっているのではありません。私は、まさに私の法的な作品をまとめている最中でございまして、そのために光はその輝きをとり戻しているのですが、しかし悪いことに、論争がしょっちゅう起こっているのです。私たちとはちがった別のドイツ人のため、現在、たしかに重苦しい気持ちで生きているのであります。しかし空しく生きてきたのではなく、空しく抵抗してきたのではないという気持ちでおりましたところ、このようにすばらしい名誉をいただき、すこぶる元気づけられたような気がいたします」

彼は喜んでこの名誉を受けいれた――そうなったのは、全く特別な個人的な理由からでもあったが、賞金は在ベルリンのスウェーデン総領事から、ちょうどクリスマスまでに与えられたのであった。〝その立場からいってまだ若者というべき〟この人は、十六人の子供をもっており、そのうち六人の息子と六人の娘がまだ生きていたのである。しかも娘のなかで五人が未婚で、モムゼンの側にあり、その家をまもっていた。ノーベル賞の賞金は、子孫のために重荷を負わねばならぬこのシャーロッテンブルクの老教授の労力をすこぶる軽減するのに役立ったであろう。次の年に彼はこの世を去るべき運命にあったのである。

「私たちとはちがった別のドイツ人のため、現在、重苦しい気持ちで生きている」とモムゼンはアカデミーへの手紙のなかで訴えている。モムゼンは、自分もその一人であるドイツ人の特別な動きを、この一

1 『ローマ史』第五巻「序」の最後の一節である。
2 ゲルマン人の族長。西暦九年ローマ軍をトイトブルクの森で破った。ゲルマン人の英雄。
3 ギリシアの女神。文芸・音楽・舞踏・哲学・天文など人間の知的活動のすべての女神。とくに文芸・音楽の女神。九人。
4 歴史の女神。

文によって述べていたのである。つまり独立の精神、自由なヒューマニズムの代表者たるドイツ人――。この人物モムゼンは、一八四八年の自由なる民族主義者であった。祖国の自由のため、多くの友人と同じように、彼はドイツのためにビスマルクの地位をたしかに認めたのである。しかしこの人物モムゼンは、また愛国者でもあった。そこで、アルサス問題についてのフランスに対する猛烈な思いが、フュステール・ド・クーランジュ[1]との激しい論争のなかに、モムゼンをひきいれたのである。しかし、ドイツの宰相ビスマルクがひきつづいて示した行動に対して、モムゼンは、批判的で嘲笑的な態度を示した。それゆえ、彼は、その政治演説のため高等裁判所に追訴されたのであった。世紀の終わりにドイツにひろがった反ユダヤ主義および国家主義の反動は、彼の心を不快さと嫌悪感で一杯にした。

「やがて、われわれは、結局、ただ正当なる市民に組することのできるようになることであろう。つまりそこで、第一に、マンヌス[2]の三人の息子の一人によって自分の系譜を回想させられ、第二に、司牧者が解説できるような福音書を容認させ、第三に、開墾し種を蒔きうるようにすることができるのである。古くから鳴り響いてきた信仰に関する闘争、つまりひとが文化闘争と名づけている闘い[3]と並んで、実は、そしてまた財布の問題に関する、新たに火のつけられた小さな闘いと並んで、第三の闘いが、今われわれの間にあらわれてきたのである。それが、民族感情の出来損い、ユダヤ人排斥論者の闘いなのである」と。

ストックホルムからの知らせを前にして、『ベルリーナー・ターゲブラット』誌は、一九〇二年、次のように記している。

「スウェーデン・アカデミーは、この賞のため、将来のあらゆる賞の値打ちを回復したところである」

これは、また後世の目であるともいえよう。　（長谷川博隆訳）

1 フランスの歴史家（一八三〇～八九）。古代・中世史家。封建制、荘園制のゲルマン起源説をしりぞけ、ローマ的要素を強調した。主著『古代都市』『古代フランス政治制度史』。

2 古いゲルマン人の神。トゥイスコの子（タキトゥスのゲルマニア）。

3 反プロイセン的なカトリック教会を統制するために、一八七〇年代にビスマルクの行なった対教会政治闘争。教会の弾圧。

テオドール・モムゼンに対する ノーベル文学賞授与に際しての歓迎演説

スウェーデン・アカデミー常任理事
C・F・アヴ・ヴィルセン

一九〇二年十二月十日

陛　下
閣　下
淑　女
紳士各位

ノーベル賞授与規約の第二節には、次のように記されております。〝文学〟という概念のなかには、ただたんに純粋なる文学作品が含まれているばかりでなく、形式および内容の点で文学的な価値のある作品も含んでいるのである、と。実は、こういった解釈は、たとえば哲学者やあるいは聖書の解釈学者、科学者やあるいは歴史家にも、ノーベル文学賞の授賞を認めていることになるのであります。もっとも、それは、作品の内容の高さだけではなく、その叙述が芸術的に優れている点で他を抜きんでている場合のことであります。

スウェーデン・アカデミーは、本年度は、私たちにその名の提示されましたたくさんの輝かしい人物のなかから受賞者を選びださなければなりませんでした。その結果、アカデミーは、賞を歴史家テオドール・モムゼンに与えたわけでありますが、アカデミーとしては、もっともすばらしい人物を選んだと考えております。モムゼンの名前は、実は、王立プロイセン科学アカデミーの十八人の会員が推してきたものなのであります。

公刊されておりますモムゼンの著書、論文の目録は、ツァンゲマイスターがモムゼンの七十歳の誕生日を記念して編纂したのでありますが、その点数は九百二十に及んでおります。[1] なお、モムゼンが生涯かけて行なっておりますもっとも重要な企画の一つに『ラテン碑文集成』の編纂がありますが、それは、多くの学者の協力を得たものであるにいたしましても、モムゼンは十五巻の各巻に寄稿しておりますし、まことにヘラクレス的な巨大な仕事といえましょう。そしてやはりなんといっても、この大事業の全体を組織してきたのは、彼の功績といってよいと思います。学問の世界における正真正銘の英雄モムゼンは、ローマ法、碑文学、古銭学、ローマ史の年代学、ローマ史一般に関して、オリジナルでかつ将来の種子を蒔く研究・仕事を行なっているのであります。どのような偏見をもった批判者でありましても、次のことは認めざるをえなかったといえましょう。イアビギア[2]の碑文についても、またアッピウス・カエクス[3]の断片についても、カルタゴの農業についても、彼が発言するときには、いつも同じような権威がある、ということであります。教養ある一般の人には、主として、歴史家モムゼンの名は、その著作『ローマ史』(一八五四～五六、一八八五)によって知られておりますが、実は、スウェーデン・アカデミーをして、モムゼンにノーベル賞を与えるようにさせましたのは、とりわけこの記念碑的な著作によるのであります。

この著作、つまり『ローマ史』は一八五四年にあらわれはじめたのであります。第四巻がまだ出版されませんでしたのに、一八八五年には第五巻を世におくったのであります。これは、帝政下のローマの属州の状態についての優れた叙述といえましょう。私たち自身にも近い時代でありますので、最近の活動領域に適合する叙述となっております。この点は、ノーベル賞規約のなかで述べられております点に妥当し、作者の全作品を真剣に評価するにあたっての出発点として利用できるものだと考えられるわけなのであります。モムゼンの『ローマ史』は、多くの国の言葉に翻訳されています。それは、スタイルが力強く生き生きしているばかりでなく、それと共に学識が徹底的でしかも広いものである点、まことにすばらしいものがあるといえます。モムゼンは、膨大な史料を自在に取扱うことと、鋭い判断力、厳密な方法、若々しい力と、更に芸術的な描写力とを結びつけているように思います。実は、右のこと以外には叙述に生命力と具体性を与えるものはないのであります。

モムゼンは、どのようにして籾殻(もみがら)から麦を選り分けるか、そのすべを知っているといえます。彼の大変なる博識、そしてまた彼の秩序立った良識ほどに高く評価でき、讃美すべきものが、いったいどこにありましょうか、あるいは、彼の予言者的な直覚的な想像力とか、彼の注意深く調べた事実を生き生きと描写する創造的な能力ほどに、高い評価を与え、讃美すべきものが、いったいありましょうか。彼の直覚的な予言の力、創造、表現の才は、歴史家と詩人との間のギャップに橋をかけるものであります。モムゼンが、『ローマ史』の第五巻において想像力(ファンタジー)は詩の母であるばかりか歴史の母である、と申したとき、この両者の関係を感じとっていたといえましょう。たしかに類似点ははっきりと分かります。ランケ[4]の超然たる客観主義は、ゲーテの平静なる偉大さを想起させるものがありますし、またイギリスで、マーコレー[5]をウェストミンスター寺院の詩人のコーナーに葬ったのは、本当に正しかったといえましょう。

大胆で雄大なる筆でもって、モムゼンはローマ国民の性格を描き、またローマ人の国家に対する従順さは、息子の父親に対する従順さにつながることを指摘したのであります。特別にすぐれた手腕でもって、モムゼンは、取るに足りないような始まりから世界を支配するにいたるまでのローマの発展の巨大な壁画を私たちに描いてくれたのであります。ローマ帝国の強大化によって、頑強に保たれている古い制度に、国家の新しい課題が合わなくなったことを示しているのであり

1 のちにヤーコブスが、増補して一九〇五年に公刊している。もちろん八十六歳まで生きたモムゼンの著作は、これより多くなっている。

2 イタリア半島の南底部"かかと"の部分に対するギリシア著作家の呼称。ローマ人はカラブリアと呼ぶ。

3 アッピウス・クラウディウス・カエクス。古代ローマの政治家(前三一二年の戸口総監)。ローマ史上、最初の個性をもった人物。アッピア街道の建設者。ローマ最古の散文作家でもある。

4 レオポルド・フォン・ランケ(一七九五～一八八六)。ドイツの歴史家。ベルリン大学教授。史料批判の方法を確立し、近代史家の祖といわれる。

5 一八〇〇～五九。イギリスの著述家、政治家。主著『英国史』で知られる。

ます。また民会の至上権が次第にフィクションとなり、そのことが、ただ偶然、自分の目的のために活動する煽動政治家たちによってはっきり覚らされた、ということを示したのであります。また元老院がいかに立派なやり方で国事にたずさわっていたかということ、だが一方、古い寡頭政的な貴族政が、かつては時代の目的に役立っていたのに、もう新たな要求に応えることができなくなったということを示しているのであります。また非愛国的なものになることの多い資本主義が、その力をいかに政治的な投機に乱用したか、そしてまた、中小の自由農民の消えたことが国家にとって次第に不吉な結果を生みだしてゆくことになったことを示しているのであります。モムゼンはまた、執政官[1]が頻繁に変わったことが、いかに統一的で首尾一貫した戦争の指揮を妨げたかを説明しております。もっとも、このことが軍指揮権を延長せねばならない、ということになったのでありますが。一方それと同時に、将軍がますます独立していったことを示したのであります。なおカエサル主義が多くの理由で必要となったのでありますが、しかしとりわけそれは、この時代の現実の帝国の必要性と釣り合った（代議制）制度が欠けていることによるのでありました――こういったことが、いかにしてそうなったかを説明しているのであります。多くの場合、絶対主義ならば、寡頭政支配よりもずっと不吉なものをひき起こさなかったであろう、ということを示したのであります。誤った雄大さは、いずれも、歴史家の妥協しない目の前では消えてしまうと思います。麦は籾殻の中から選別されるのであります。彼の讃美したカエサルのように、モムゼンは、現実の要請に対して曇らない目をもっているといえます。そして、ガリアの征服者たちの場合、あの幻想からの自由さを、モムゼンは賞讃したのでありますが、そういったものを、モムゼンはもっていると思います。

ところが実は、次のような点に対して種々の批判がむけられているようです。つまりモムゼンは、その独立不羈の天才によって、主観的で熱情的な判断のため、理性を失うことが往々にしてある、というのであります。とりわけ、死にかかっている政治的自由の最後の支持者、カエサルの政敵について、またあの困難な時代に党派の間を揺れ動いた人たちについて、非好意的な評価をしているという点で。なるほど、反論、それは多分いつも全く正当化できないというわけでありませんが、反論は、ほかならぬ、法が踏みにじられるような場合でも、天才の力をモムゼンが讃めたたえる、その彼の流儀にむけられたのであります。また大逆罪のための審理のない歴史において、革命家がすこぶる達見で賞讃に値する大政治家であり得る、という彼の筆に対してもむけられたのであります。一方それに対して、モムゼンが非理性的な力などを賞讃しはしないで、国家の高い目標につかえる力をほめたたえるということは、強調してしかるべきであると思います。「罪業の天才にけがされている場合、讃美の言は、歴史の聖なる精神に対する冒瀆である」といったふうにしっかりと記されている彼の信念を記録しなければなりません。また、モムゼンは、古代のことを語るにあたって、しばしば現代の表現を用いてまいりました――それは、完全には一致しないのですが（ユンカートゥーム[2]、ローマのコブレンツ[3]、「スペインの」宮廷の朋党、「十五、六世紀の」ドイツの傭兵、元帥、「イタリアの」捕吏など）――ことも注目に値するといえます。しかし、異なった時代の歴史的な現象の間の類似性を強調するというこのやり方は、たんにモムゼンの想像力の生んだものというべきではなく、彼の学識の生んだものというべきです。それは、意のままに、歴史上の種種様々の時代から多くの類推をなすことなのであります。もしも、それが叙述に多様な色づけをするものでありますならば、それはまた、新鮮味を加えるものであるともいえましょう。因にいえば、モムゼンの立場は唯物史観の立場ではありません。彼はポリュビオス[4]を尊敬してはおりますが、この人が、人間の道徳的な力を看過ごしているとして、それを咎めておりますし、またあまりにも機械的な"世界観"をもっているとして、そのことを非難しております。ガイウス・グラックス[5]に関しては、霊感を受けた革命論者としての方法を、ときには賞讃し、またときには非難しておりますが、モムゼンは次のようにいっているのであります。つまり統治する者と統治される者とが、お互いに共通の道徳で結ばれていなければ、いかなる国家といえども砂上の楼閣の如きものである、といっているのであります。健康なる家庭生活は、彼にとっては、民族の核心なのであります。彼は、厳しく、ローマの奴隷制度の悪口を咎めております。彼は、民衆がまだエネルギーをもっているならば、災厄によっていかに道徳的に力づけられ得るかをみたのであります。もしそうであったら、そこには、教育的な真理

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com